

調査研究彙報

南都諸寺社所蔵典籍文書の調査研究 東大の史料編纂所と共同で継続して行っている薬師寺調査は、第25函～第27函の調書作成と第20函の写真撮影を行った(95年7月)。80年間以上の分の修二月会壇供支配状が連券として連綿として貼り継がれたものや富くじ関係資料など江戸時代の薬師寺の実態を示す興味深い資料がみられる。また法隆寺文書を継続して調査し、『興福寺典籍文書目録第2巻』を刊行した。その他西大寺一切経の調査に参加した。また、調査成果のDB化(薬師寺と京都仁和寺分)を継続して行っている。(歴史研究室)

その他の典籍文書の調査研究 醍醐寺文書の写真撮影(95年8月)を行い、第18函分を完了した。文化庁所蔵品の「内家/私印」のある瑜伽師地論等の撮影(96年3月)も実施した。また、石山寺聖教典籍・永源寺文書(滋賀)、興聖寺一切経(京都)などの調査に参加協力し、文化庁美工の指定関連調査(醍醐寺文書、井伊家文書、冷泉家典籍、東大寺修二月会資料)に協力した。(歴史研究室)

桂離宮の発掘調査 桂離宮(京都市西京区)の庭園基本整備工事にともなう発掘調査を、宮内庁京都事務所の委嘱により、平成6年度から実施している。平成7年度は、神仙島の護岸石組・笑意軒前の2基の階段・賞花亭下の織部灯籠など、修理予定箇所に小トレンチを設定して調査をおこなった。このうち、笑意軒前の2基の階段については、最下段の踏み石がほとんど磨耗しておらず、築造後間もない時期に埋没したものと推定できた。また、織部灯籠は、竿に彫刻された人物像の全貌が明らかになり、そのほかの特徴とも併せて、1640年代前後の制作と推定できた。これは智忠親王による第二期造営工事の時期と一致する。(小野健吉・小澤毅)

文化遺産の地域特性 文化遺産の地域特性に関する第一回の研究会を「琉球の文化遺産の保存と整備」をテーマに平成7年10月19日、奈良国立文化財研究所小会議室において開催した。沖縄から参加された当真嗣一(沖縄県立博物館課長)・上原静(沖縄県文化課係長)・福島駿介(琉球大学工学部教授)・末吉栄三(設計事務所主宰)・山口洋子(あい造園沖縄事務所長)各氏の話題提供をもとに討論を行った。沖縄は、グスク・ムイ・ウタキ・カーなどの文化遺産がかなりの部分日常生活のなかに生きており、今後の都市整備や地域整備・遺跡整備に際してそれらの文化遺産と市民の日常的関わりを断ち切らないようにすることが重要であることを確認した。(加藤允彦)

名勝旧大乘院庭園の整備 (財)日本ナショナルトラストが国庫補助を受けて実施する名勝旧大乘院庭園の整備は今年度から、大乘院庭園の本格的な発掘調査を年次計画にしたがって実施し、調査成果に則って主として江戸時代の庭園遺構の整備を順次実施することになった。今年度の発掘調査は池の南岸部と東岸南部の一部約600㎡を調査した。平成7年度の整備対象範囲は園池の南岸部(東西53m、約600㎡)である。指定地南部の敷地境界は、西半部は民家の塀、東半部は大乘院庭園文化館となっており、調査で確認された汀線からそれぞれの境界までは数mしか離れていない。特に大乘院庭園文化館は大乘院庭園の活用を目的に建設された施設である。そこで整備の汀線の平面形状は、西半部は遺構を保護する分だけ汀線を北に約2m寄せ、東半部は大乘院庭園文化館の活用上必要最小限の広さを確保するため6m汀線を北に寄せ、西半部と東半部のすりつけは検出汀線が北へ少々屈曲するところを利用して違和感のないように東西の汀線を連続させることとした。また、汀線護岸部の施工仕様は次のとおりである。まず、汀線の範囲約2m幅で粘土を叩き締め、計画水位高で地盤のずれと浸食の防止を兼ねた杭丸太を打ち込む。次に、粘土上面に径15cm程の石を撒いて軽く叩き込み、その上に径3～5cm程の石を撒き小石による洲浜状の化粧とした。そのほか地被は野芝とし、移植仮植えの松や梅・カエデなどの植栽により若干の修景を行なった。(加藤允彦)